

10 年計画で進めていた復元も今年度で終了し、来年度から3年間は、東門や南門、礎石建物などの遺構の保護を中心とした整備を進めていきます。

鬼城山整備委員会の委員長を務める坪井清足さん（元興寺文化財研究所所長）は、「復元された西門や角楼をみれば、攻めて来た敵に対して防衛がしやすい位置関係にあることを、来場者は目で見て実感できる」と、フィールドミュージアム（野外博物館）としての効果の一例を示してくれました。

外へのアピール

「鬼ノ城の築城時期は、鬼ノ城単体で考えるのではなく、九州や瀬戸内の神籠石系山城と合わせて考えるべき」と、坪井さんは話します。まだまだ未解明な点が多い鬼ノ城。それゆえに歴史ロマンが漂うこの地域には、多くの古代史ファンが、熱いまなざしを向けています。

国民文化祭・おかやま2010の総社市主催事業の一つ「シンポジウム『古代吉備の風景』」で指摘された課題があります。それは、市の受け入れ体制であり、外へのアピールの仕方でした。

パネルディスカッションのコーディネーターを務めた神崎宣武さん（民俗学者）は、「文化観光という機軸をもつべきで、文化と観光は相互関係にあり、高め合う関係にある」と説明。そして、「小さい単位で総社のファンを増やすことや、他の文化的なものや娯楽、周辺の文化財とのタイアップで魅力を高めることなど、みんなで知恵を出しあってほしい」と、エールを送りました。

シティセールス

市の魅力や個性を国内外に売り込む「シティセールス」という言葉があります。まちを愛する人々が、それぞれの立場からわがまちを売り込むことで、多くの人

が訪れ、まちを活気あふれるものにしようとするものです。

これまでふれてきたように鬼ノ城には、遺跡の見学を楽しむ、ウォーキングやハイキングでの健康増進、自然散策など多方面からニーズがあります。遺跡としてはちよつと異質ですが、これが鬼ノ城の魅力であり個性でしょう。

シンポジウムで指摘された問題の解決策は、シティセールスという考え方のなかにあるのではないのでしょうか。市の宝・鬼ノ城のよさをよく知っていただき、行政だけでなく、市民の皆さんと協働で取り組んでいきたいと考えます。



シティセールスでまちの魅力を発信 まちを愛し、よさを知る

歴史は続き
伝説は今
よみがえる

夜が朝と入れ代わり
大地は
露に濡れて目覚める

鬼ノ城の山は遙かに
七つの星は巡り
地球は
永遠の軌道を
回ります

詩 なんば・みちこ
（抜粋）

市の宝として守り続ける

鬼城山ビジターセンターには、なんば・みちこさん（上原）が詠んだ交響詩曲「吉備路」の第四楽章の「歴史は続き」が、文化功労者の高木聖鶴さん（真壁）の揮毫により展示されています。ここではその抜粋を紹介しました。

吉備路の悠久の歴史と文化に思いをはせて詠まれています。めまぐるしく変化する鬼ノ城の今も、長い歴史のなかではほんの一瞬。先人から受け継いだ鬼ノ城を総社市の宝として、しっかりと末長く守っていくことが、私たちの最大の責務だと考えさせられます。

